八代集抄

後拾遺集上下序

二十二

特別
イ4
3163
104(22)

いかにねておくる哥は
只一夜明くる年を
去こと路をかへれる
と興してかく詠る
なるへし心敬僧都の
私語（サヽメコト）に此哥の哥れ
本にも思案のまゝ
立とはいひかたやと
此哥とを始へ出され
侍り
いてゝみよいまは霞も
都のまつ春よりむかふ
といふは陸奥まて
なれはそれよりなをと

後拾遺和歌集第一

春上

正月（ムツキ）一日よみ侍りける　小大君（三条院女蔵人左近 同人也）

いかにねておくるあしたにいふことそ
きのふをこそとけふをことしと

みちのくにゝ侍りける時春たつ日よみ侍りける　光朝法師母（因幡守橘行平女）

いてゝみよいまはかすみも立ぬらん
春はこれよりすぐとこそきけ

貴
14
3163
104(2)

よめるなるへし
春ハ東より　礼記月令曰迎春於東郊
朗詠曰誰言春色従東到露暖南枝花始開　菅三品
あつまちハなこその
勿来関陸奥之
なこそとは詞よ
ろてよみける
こそとて心明し
あふさか乃せきをや
心ハ明し　音羽ハ
山をとよめりつ逢
坂と續合せより

春ハ东よりきたるといふ心を
よミ侍りける　源師賢朝臣（参議資通子右中弁）
あつまちハなこそ乃関もある物を
いかてか春乃こえてきつらん

春立ける日よめる　讃岐守俊遠子
橘俊綱朝臣　修理大夫
あふさか乃せきをやはるもこえつらん
をとはのやまのけさはかすめる

寛和二年花山院乃哥合によ
読侍りける
大中臣能宣朝臣

春乃くる道の志るへハ
彼集こそりふかり
かやう乃哥の体なり
春くる道の志るへを
よめるなるへし
人来れといひおもひ
今来んといひ人ハ
誰問くるとハ待つと
思ひ出つらむ年
もはや春になりても
いかてと問ふ人もなし山路
ことさきうとし
山居乃本意を思ひて
雪ふかく春をまつ
心なるへし

春乃くる道乃しるへハみよしのゝ
山にたなひくかすミなりけり
さしころわよ山ちるに侍りけるまれ人ハ
いかでさ人乃とひくれけれハよめる
人来れといひしおもひしかひもなく
としもやまちかくこゆるあかつき里
山ちかく正月に雪乃ふれるをよ
める
平兼盛
雪ふかくみやふかきよし山さとに
いかにてかハ春をしるらん

加賀左衛門 加賀ハ丹波
奉親女 入道一品宮女
房
ゆかしき春ハくれとも
野辺ハゆかれとも身
乃を年ハ立ゆかすと
朗詠ニ鶴有リ雅語老
遐ニ還リ良春道
と乃すむさハ乃
鶴鳴リ于九皐ニと詩ニ
其心よりよめり下
根とけとハ氷消れと
芦の根もとけれさ
その春陽の気をうけ
てとけ出るこゝろ

題しらす　加賀左衛門
ゆかしさハ春ハくれとも野ふよある
としへぬるのゆかすもとなる
天暦三年（村上天皇年号）太政大臣（忠平公）乃七十賀之時乃
屏風によめる
大中臣能宣
と乃すむさハ乃芦たつねとけ
みきはそとし出るなるハきよけれ
一条院御時殿上乃人こ春哥と
こひ侍れハよめる

童蒙抄ニ云としくハ
生出るを萌（キザス）と云
みよしのハまのゝき
むすほれてると雪
にあつてもえそ
めすなと也
谷河乃こほりもいまた
晴乃底下乃氷
気をうけてとけかぬる也
隆経　左中弁頼任子
前美乃守　時明孫
まこもりの代
春むれハ野べくら
かすめる景気を

紫式部（越前守為時女 上東門院女房）
みよしのハ春乃けしきにかすめとも
むすほれてる雪乃したくさ
花山院哥合に霞をよみ侍
る
藤原長能（ナガタウ）（伊賀守 伊勢守倫寧子）
谷河乃こほりもいまた消あへぬに
みねのかすミハたなひきにけり
題しらす　藤原隆経朝臣（蔵人式部丞ニて叙爵ハ公の子息達通例にて叙爵く）
まこもまの乃まれりつねハ
おもしろしすみや立かへるらん

こゝろあるさきに悔たるし
まかふ花ありやまさき
おもひけるゆへかも
此時乃（ヨシキヤウ一条之主　カネイエ二条久臣）良基公御中
御車寄合此時の主
これハ桜狩関白の家
に春の雅大臣（下字）のこの上遊
郷と招きて桜の宴
年の事を定める
云歌よてい詠たり此
時のわたくし紅梅重
桜かさね袖をつらねく
はなやかなる事きこえ
しつけい袖の数も
なのよろこびをよむ也し

和泉式部

春かすみたつやおそきと山川乃
いはまをくゞる音きこゆなり

（倫子御堂殿室左大臣雅信女）
鷹司殿乃七十賀乃月次の屏風に此（正月の事勘ふ）
時まつりはつる所をよめる

赤染衛門（赤染時用女　鷹司殿女房）

むらさき乃袖をつらねてきたるかな
はるたつことハこれそうれしき

上達部乃袍（ウヘノキヌ）の色也此時分ハ摂家氏饗（キャウ）に
春臨時客（リンジキャク）とよめる

小弁（越前守懐尹女　祐子内親王女房）

むれてくる宮わらや人
是此時分の世の中せ
る人々の事なし此時分
年ごとなるところありて
火もをてくかりける也
まうくとよめる也
大饗（ダイキヤウ）に侍る此年中行事
年会注云大臣乃饗（キヤウ）
の大饗ハ年をてく
ところ侍りし
鷹飼にて侍りても興あるまゝ多く侍きこれハ藤氏乃長者宗
兄乃饗なるよし侍るなし下略行次第二表　多くハ同会云大臣大
饗とハ新任乃大臣官乃外記り立左右子ね招きて饗宴（アフ）するなり
むらさきもあけもみとりもうれしきハ　為殿上人乃袍乃色なし紫ハ三位以上緋ハ五位緑（ミドリ）ハ

むれてくるおほみや人ハはるをへて
かはらすあるものゝしきりなる

入道前太政大臣大饗し侍りける屏（御堂のまさし此大饗寛仁二年正月廿三日と栄花物語に有）
風に此時分のうきさまとる所を
よめる

藤原輔尹朝臣（木工頭　大和守興方子）

むらさきもあけもみとりもうれしきハ
はるのはしめにきたるなりけり

同屏風に大嘗会のつかひきたる所

とよみ侍る　入道前太政大臣

君か世とやまつるはくひさかさし
のへ乃きくすへよりや生つらん

六位と衣服令より
見えたりさるに
東するまでてし
君か世とやまつる使
是ハ大嘗会に以て鶯
象集にて若衣の
ことゝ不使にすて
年し沢第云主人暑親王座遣客使罷　又云号志二人ある時ハ
二人乃使を召て信せく云ッされしの大殿よまかりて上達部まうて
あひかるよしやさしめのとこ作を遣てゐるのかて中門りを出
まかりてよさしめてするかき乃お駄を奉仕をとそこをやり
つる使ひまぶしとよしまうやの人乃きてすこしかやさつんとそ
是し大嘗会り侍りし沢第云藤朝臣ル西乃幔門より入て庭中よ
渡る大臣おまゑす五位の下れ人出ゆく雉をとりて幄乃ひつ
さる乃角の上りさしそさむとくふありさまなるべし

民部卿泰憲近江守にて侍りける時
三井寺にて歌合し侍りけるに
よめる　　読人志らずて

春きてもふる志雪を鶯乃
花ちりぬとやいそき出らん

鶯をよみ侍りける
　　大中臣能宣朝臣

山かくし雪ふるすみかひとの
いつるをつねハゆかしかなきなる

春きてもふる志了
咲はさく出つべき
鶯れ春雪を花
ちることゝくいす
まとく幽谷より
出んとさ
山かくし雪ふるす
雪隠とハひらけて
し詩よ出自幽谷
遷于喬木黄鳥の
語し山かくし雪衣
巣よとのつる幽谷

正月二日あらたまりて鶯れ

乃心おもしろしと明し
ふるさとへゆく人あらハ
逢坂山こえて鶯を
きてめつらしか
りつる心を古人
よし鳴やうまれ
きこし任るとなり
乃時をすへし
梅乃枝といふ題を
侍る条ゟ　梅のよ
きかる鶯をうけて
あけしものを賞
かりつて
かすみたる雪まもみえぬ
心ハ明し　斎院の語

一こゑをきゝてよそに待ける
源兼澄（かゝ守　鎮守府将軍信孝子）
ふるさとへゆく人あらハことつてん
けふうくひすのはつねきゝつと

選子内親王（村上第十皇女号大斎院　母中宮安子）
正月三日上達部あまたまゐりて
梅乃枝といふ事をとりてよひはへりけるに
侍るる内にかはりてよみて
よみ侍る　よみ人しらす
かすみたる雪まもみえぬやまさとよ

ふか山里をと読て
加階ゆるさる　宵乃
叙位に位をゆるさる
事也　江次第に委
うれしさ乃あまりね
春乃はてねといふ君
乃恩澤のあまねなり
らねと我述懐の
聞を鶯代りて
うれしさも本意
ものとのよふてさ
ら出里宿へと
よめる語也
たつねつる宿ハ
心ハあきらか也

まちもしらうつひとへ乃こゑ
加階（カカイ）よりくるよしまかりいでて鶯の
なくをききてよみ侍ける
清原元輔
うれしさのねにつつもゆゆる
まつ乃うへねひとしれやとふい

こはれ乃胡侍の家にて春山里
に人をたつねといふ心をよめる
藤原範永朝臣（摂津守　尾張守仲清子）
たつねつる宿ハかすみにうつもれて

声直轉白霧山
深烏一聲と作
可し頭餅の併るや
餞宴子云錢衆云饗
今世專ら八ッ専也錢と
ちとせへんやとれ
法性寺乃法家を
ちとせする所り
おそつけてしや右
の松をみのさかし
もひんとさし松
ひく飯し
ひきつれくりふハ
みとせの上ニ今ニ
年毎のつんとうお

よふ乃うくひとひとこゑうする、
小野宮（実頼公）太政大臣乃家ニ子日志侍
りけるによみ侍る
清原元輔
ちとせへんやとの子日乃松をこそ
よそ乃ためしにひかんとすらめ
さい志ても 和泉式部（拾遺作者）
ひきつれてけふハねのひの松に又
いまちとせをそのへにいてつる
正月子日庭におりて松をさす

春乃野より出ね子負ハ
心をやるとハ愛を慰
むるをいふ此れを常
を野よりやるうへ
てよむわて庭ニ松引
すさむをよめるし
良暹法師 祇園別當
又來祥 母實方家童
白菊 作者部類
賀茂成助 神主成真子
天喜四年十二月九日叙ス
外從五位下ニ 行幸賞
けふハ君かひくるゝの子
日のさうひそう
ちとせ乃ゆくへいつる

さひはひき侍るとてよめる
よみ人志らす
春乃野より出ねねのひハともかひとれ
こゝろそかわをやるうあそひける
正月子日ニ付て侍る良
暹法師乃もとよりねのひなるん
出るいさすといひをせく侍るよ
えもせて月これにかよせて
はかつかる 賀茂成助
けふハ君かひくる野へにねのひきて

のまゝ子日て稚まつ
ことまつきてらひく
松をまつりてまゝと
上まうらへのみかと
ひ口殿大臣
袖かけてひきまつ
るへく千世の松なれ
は袖かけてまてをと
わきてひかんもせ
られぬ世そ上東門
殿上人ひきましもさ
千世のはきとてる
ことかくし

ちかひてねのひの松
心ゆくヽ
行末とほりの人乃霞の
まなひくとりすてゝ
と身ひく人乃小
松をゆのすもて
行末とほりの人乃霞
いつめるもとよめる
翁を世ゆ縁霞と
りまり河旦松をも
よせある翁されて
君乃代にひきくらふ小松

ひとまゆ川をこえてねあまゝん
（白河院）今上六條におはしまして上東アらへ
乃みのこゑもあと中將におわりて子日
し侍りけるよしに侍りける
（前右府公）右大臣北方　（權中納言隆信女）從一位源隆子
袖かけてひきそやれぬる小松原
いつまてもかきこちよれなきさり
三条院乃御時に上達部殿上人合
と子日せんとし侍るに女院乃女
房小まちのまゐらんと志けるをとゝ

きみかうれはそのはしめて女院
子をまゐ侍る　堀河右大臣（頼宗公　御堂殿息）
ことしよりねのひ乃松をかそへて
いくぬさめしらひくる君か郷
野志けるを　民部卿經信（大納言兼帥　中納言道方男）
行末とほりの人乃霞乃まなひくよ
冬乃こ川をとまの世つるゝる
承暦二年（白河院乃在位の年号也）内裏歌合ねのひをよみ侍る
左近中將公實（大納言實季男）
君乃代にひきくらふれはねのひする

卯乃はし

人ハ子の日野へ出て小松を
雪乃緑を若菜を摘
ありつへくし
うづえつきをもや
卯杖つきさゝやゆへ
さとの所し童蒙抄
云持統天皇三年正月
天皇万國ニ於せめて
前殿ニして上卯日ニ
當て大舎人寮より
杖八十枚たてまつりし（記課）

松乃ちとせも出すらね乃歌し

正月七日子日にあたりて雪ふり
侍りける日よみ侍る　伊勢大輔（祭主輔親女　上東門院女房）

人ハみな野へ乃小松をひきにゆく
けさ乃わかなハ雪やつむらん

正月七日卯日にあたりて侍りける
に卯杖つきをやるとて通宗
朝臣のもとよりいひをこせて侍りけれ
ばよめる

うづえつき流ゆくわきハ玉さかり

是そのめて云る雅源
云ふるこの木をふる人之
すてに切て二束三束
にゆひくたまる延喜
うつえつきはきわき
玉さかる君をふと云
みやく春日野乃
わか菜をよめり
志ら雪のふるさ山里
春日野をと古くさとに
ある伊勢物語ニわか
れもと来てみとつる
ねなるも心消く
若乃野ハ雪のこ
そよ緑ニ摘ニ来

きのふまてひ乃わかなあかれけり
野そへても　大中臣能宣
志ら雪乃またふるさとのかすか野ニ
いさうちつひわかなはつてん
和泉式部
かすか野ハ雪のみつむと見しかとも
おひいつるものハわかなゝりける
後冷泉院御時皇后宮歌合ニ
よみ侍る　中原経盛（散位為宗）
はるかなる人いまれともあかれぬ

さし宮地也
はやまる人やみれなま
わかなゆひ給へる
野とよみと志め野に
とてる心に明之八雲抄
云しめ野　山城是在
清輔初学抄ニ野の名
か名のより句題にて
むすきてみすかきゝる
秘事かきゝる事を
さるらく野のわかな
あらハ人もはやみよう
て年の秘蔵をく
きとのみとし
奥儀抄拾遺集つみ

わか志めのゝわかなまれとも
正月七日周防内侍乃もとへつかはしける（周防守棟仲女　白河院女房）
藤三位（白河院御乳母　大和守従四位下親国女）
むすてゝもてさある年をかそへつゝひとの
こゝろよるのさ乃わかなをもつ郎し
（拾遺集十一面或雅眠　宇多院御時よこ双拾遺国东）
ちらまちらく拾て霞の心をよみ
侍ける
大江正言（大学大允　大隅守仲宣子）
山さとはやこ氏まちこそわかせへ
さとひとのかみすゝらかり
能因法師

むさしのりてまさに宮
の邊なる京のわかなく
をとめわらひあそひ給ひて
やまとこやこのもとを
ちらするよりの眺望之
よりみてくうわかなつみ
そも〳〵同時の哥をも
都の中にそいでる霞
める京の景色へと志
らさるとも野りく
見わたせる風情と
春日かはかなみよめり
それも飛鳥ととり里と
よめるいつる由（藤原）
ともしるとや〔の坂
八重の溝山海上邊

よろつよをむすひこくさかしこ乃
みやこ乃まへハかへりける
結ひても　選子内親王（村上皇女　大斎院とも）
春日かむすみけむよのふやま里へと
よろつよ〳〵とふ人乃あさきの郎
春日のみそとはふりつ細ひくを
とて詠ける　藤原範信（河内権守従五位下）
ちるらくとやはの志わなにもくわまと
あらひくものもむすみわたりわ
といひてしを　曽禰好忠（丹後掾　拾遺集之）

あさまし棚なし綱
ひくにいはけさし
千よにはのそし
角組芦ハ芦筆乃
斑角のやうなるを詠
芦雛と化するといふ
江にはあし芦の根の
よまれと序哥に読之
ころおん人にみせ
長明無名抄云蘆能
出の好けるかなの
やしさせる忌と加（フルフ）へ筆（コト）
と抵る所られと云
する事も書ても如ち
るしととと
あるそうさはのそむ

千よふりはのくみわする芦のねの
ひとよれなとりきるめきていかゝ
正月ころなにはの方に侍りけるころ
人のもとにいひつかはしける
能因法師
こゝろあらん人にみせはやつの国の
なにはわたりの春のけしきを
題しらす　読人しらす
あふそもいろうらふて風に浪こそは
はのそむけの見えてまとふ千

見てをみてすまし六
見さらかえ見とあ
よわのをいい消し
はそ川野乃すゝろの
童蒙抄云すゝろの露
ことは春の野を焼るま
すゝろ露となしきよ
ある時氣のやすある氣
乃まなく稚ハ葉慢之
等はしくとのとく
感心に堪えて多と
よろうさ葉は野辺延
よちをそれ沢るてま
そよちふ野てるの
沢てまの氣見ゆるさ由也

春駒をよめる　権僧正静円（三井寺　二条関白息）
はそ川野乃すゝろのすきはのくめハ
冬こちなつむこまそいさゆる
長久二年（後朱雀院年号也）弘徽（コキ）殿（テン）女御歌合に侍りける
に春駒を読る　源兼長（お侍中なる五位　備後守通成子）
よちとそれ沢るてよふてさる駒ハ
そのかけをやなとかへるらん
屏風乃絵によるおほかわれたる様
人乃眺望（テウバウ）するをよめる
藤原長能

かりこそゆきまくもあかさも
野原ハ雲に大和こと葉
まへゆきさくもあらんと
こハ振返られハ亭より
照さの心さも　維乃さ
まれと叶すくみるも
秋ふけて乃あはれもます
萩ハ秋の表をさかるむ
あるまこと秋ふけての意
あらもて情くし春野
の萩の古根を焼ともを
やくとやくハいて焼
とめんとて重親余
も知りの本の心ハ秋
とおもうらんとおもうて

かりこそゆきまくもあかりさ野の
行さ乃そらりきすらぬわ
野もくもと　　和泉式部
秋ふけて乃あはれ（おちイ）もちつ春乃野よ
ときのふるね（ネイ）をやくとやくらん（キイ）
冷泉院御時后宮哥合に梅雪
をよめる　　藤原範永朝臣（おほ）
まちおもて物よあれきハ難波江乃
何乃わかはにふれる白雪
屏風乃うたに梅花ある家にまらうと

萩さく秋をうらんとて
こう古根を焼らんと
まちおもてわかれき
心明し行き粉雪の
こころなし
梅かゝをたより乃
君か香乃使の風乃
梅かゝとえりしやん
との香し　剣篇の
梅の言葉やさてつらん
さひの和まはえのさま
せる詠まてよめり
梅花よおむるの
来る人の袖の香と
あやまたれつつあや

きたる所をよめる
　　　平兼盛
梅かゝをたより乃風や吹つらん
春めつらしき君かきませる
同し院乃哥合に梅をよめる
　　　大中臣能宣朝臣
梅花にほふあたり乃ゆふくれを（めうせイ）
あやなく人にあやまたれつつ
春乃夜のやみハあやなしといふ心（古今集このこころ）
をよみ侍る　お大納言公任

かく第三句也
こゝハ流字を義に
春乃よのやみにしあれハ
ほ乃花のなきもきこえさ
る春の夜の闇にハ梅の
匂ひのミ花と知る也
梅乃かを夜半の嵐の
板戸を明るをまちく
ゆかしき匂ひのせし也
殿上人ニ此哥をよませ
紅梅花の咲そめてと
よみしを通俊直して
色の明るようんと直さき
梅乃花香ハことくに
後撰和哥集紅梅也

春乃よのやみにしあれハ匂ひくる
梅よりほかの花なかりけり
さいきるを　大江嘉言（對馬守）（大隅守仲宣子）
梅乃かを夜半のあらし乃吹ためて
まき乃板戸乃あくるまちけり
村上御時御前乃紅梅を殿上人にも
よませさせ給ひけるにかはりて
よめる　清原元輔
梅乃花香ハことくに匂はねと
うすくこくこそいろをさき（ぞしイ）けれ

とハれて梅花かう
ことくに匂ひかゝるよ
此哥を見いて遺
わかやとのかきね乃
梅のうつりかにひと
人と待ちするを
乃哥なるへし
我やとの梅のさかりも
さハ明し一本ニ此哥
おの哥と思ひて此
次ニ梅しよ除去く
雪ハ一とせに二たひさ
くる花とこうるれと
公任の哥也　拾遺
みの下に人今宵

山里にすみ侍りけるころ梅花をよ
める　よみ人しらす
わかやとのかきね乃梅乃うつりかに
ひとりねもせぬこゝちこそすれ
題志らす　前大納言公任
我やと乃梅乃さかり（さかりイ）にくる人ハ
をとろくハかり袖そにほへる
和泉式部
春ハたゝ我やとにのみ梅さかは
かれにし人もみにときなまし

春ハさて我着ものを
かれぬ人ハ語らう
なりし人の心明して
梅花かきねに匂ふ
梅の木に気を分ると
はけねども人の心
の風流と云風流
ことを知心にや
梅乃花のかはり白に
花ハ風をいとふもとゞ
素意法師（俗名紀伊云）
素意ハ紀伊守重經
号紀伊入道一官紀伊の
史も騎馬にて楠葉乃
御牧の政にておはする

山家（里のイ）梅花をよめる
賀茂成助（成助）

梅花かきねにゝほふ山さとハ
ゆきかふ人の心をぞみる

春風夜芳（ヨルカウバシ）と云心をよめる
藤原顯綱朝臣（讃岐守）（兼經子）

梅乃花かばかりにほふ春乃よハ
やみハかぜこそうれしかりけれ

梅花をゝりてよみ侍る
素意法師

よ下人出てやゝとかき
御枝よ不かする八着う
と然云人乃日紀乃公素
主帥後撰遺作者
とこゝ下人無色ゝく
梅乃枝へとおれもつかる
左今素性で乃其袖
と同く法師の家宗ハ
おぼつかなし
東三条　拾芥云二条
南町西南北二町
大入道殿住所云ゝ
かぞへのまつひ
后宮乃御座構と
あるハ花の面白き

梅が枝ををればつゞれる衣手に
おもひもかけぬうつりがぞする

大皇太后宮（後朱雀院后藤原妍子）東三条にて
多くせまひける家乃梅へと（弁乳母か家）
うつらうつらまで花のさかりに
思ひよりけてハと面白くさき
よる枝りむといひつけ侍る
弁乳母（加賀守藤原順時女）（陽明門院乳母）

かぞへのまつひとわらし梅花
志げのむきねをとぶらひわする

まかりしの蔵侍るむ
とゝろもちとよのを
乃垣根を与ゑるを述
わかやとにうつねはかり
我樹といへねはかり
ことはれ大切りに
心は主かにほひとも
よそひまうり
めて愛するかな
らふとも
かせふけハをちの
心ハ明し
みちのくの三位の八条
儀子女云る雅三位八
帥大臣是也八条の山荘

題志らず　大江嘉言
わかやどにうつしうゑねばかりける梅のつま
ほかにもしかばからん
清基法師（元信乃別當　業春子）
かせふけハをちのかきね乃梅花
かは我やどのものにぞありける
みちのくの三位の八条の家に
侍りける人乃家なり梅の木侍る
下にまかれてかへ人まゐる下
をよめる
藤原經衡（中宮大進公業子　大和守）

乃儀子の絵に主なる
しき人を讀て撰ひく
合書作者範房家
經範永經衡頼家
等也下畧
そねたる人のもとへ
彼はあ人はなしとも
まよのさし心ハ明し
すみむすふ人のま
みの木とむすひく
むさし心ハ明し
上東門院中将　道雅女
上東門院に宮仕へ
なすひやれかまえうこめ
心ハ明し

そねたる人もせんうめ乃つる
ちらもをりあかぬまでかくらん
水邊梅花といふことを
平經章朝臣（伊勢守範国子）春宮亮
すみむすぶ人のまさへや白みん
梅乃ちるみ此あかれて
長承二年二月ばかりに（キサラキ）
人乃とふはまうつる
上東門院中将
なすひやまさかえをうこめける山里の

なかく秋としまふ
只明しまつまつきさ
るへとりへついうのま
にはなくなりまさく
秋風のふく暮
四くらや
かつらか雲ゐつきよ
心明しゝりまつとき
よ對てとまてと
君ふるよみり
ゆきくる樣に身する
つきのいつくらく
のまうくし心ハ明し

まち中川わた乃まつのはれて

といちくもと小矢（おほゐとよ内記平家経朝臣）

かけやとる秋と見るまは小山田を
まもらねとせくてまもしきまろう

油居をよめる

赤染衛門

かつらか雲ゐたるふるすわねすり
みこん秋をしとまて也やすみよ

藤原公信朝臣（恒徳公四男）

ゆきくる樣にとしふるかな八

ことりね雲ゐみてん
花盛を人かへる
ハまと花もよりね
とはやしき居の忠
こゆるれいとの空
うすゝみにかく玉つさと
心明し 袋草紙云 孝善
劉氏詞書やうの文ミえん
きけハ家むかしまの暖
国基此歌ハいミしく秀逸
の由を称ところ不会
に嫉て無地に棄て
此歌を誦て人と招て
油居の乳を出して此歌を
とり出て人に賞養

いくよ乃まつをよろつ代にみてらん

高内侍（大和権守時明女　一条院皇后宮女房）

こゝろね雲ゐみてんくるらか
まつ乃さかりを人みかくるな

津守国基（住吉神主　従五位下忠孝男）

うすゝみにかく玉つさと見ゆる本
かすみ乃そらにかへるかりかね

安乳母（おほゐ）

おほくしはよちまかて居さきん
まつ乃さかりかつくらめくん

しるく遺恨を散じ
なりしもあはれに故え
此の名残にて花咲て
うつろひめぐるとも
おのづからなびかる
萬代かゝるとのと云
故ゝ萬代の氏ひさし
とあるんとし梅居の名
給ひを告て心ざし
何となふ乃ことをへても
年をへて柳のいとも
さしもしとて恵まする
るかとるて内裏乃
哥合かれハ誠心を
よめるなるべし

屏風に二月に山里うつろひ梅居るを
何る所をよみ侍る

大中臣能宣朝臣

かせがねうゝふてるあるやまさの
おもしろの乃ひきもとめらん

天徳四年内裏哥合乃柳をよめる（村上天皇年号ノ八年三月晦日ニ）

坂上望城　（坂上是則子）

あをむ乃ことをへはもあをやされ
いとしいつまでのあるまゆへき

柳拂（ハラフ）二池（ノ）水（ヲ）一といふ心をよめる

池水乃そこまで
心明しと侍る意也
何さそかゝるよりて
風にも又なびきさへと柳は
水まてくゆらるゝは
見ゆる風情面白き
意なるべし

藤原経衡

池水乃そこさへてらす青柳乃
ちゝみ志川えりはせざりける

題しらず　藤原元真（丹後守五位 甲斐守清邦子）

何さそかゝるれくさひく青柳の
いるまるなれゆゑせも見てゐる

二月ばかりに良暹法師のもとへ
あをやぎと青柳をそへて侍られハ
ゑうく花さくさん出ねばきて
はねいはさるまふみのたとひく

春霞たてる山の
良暹ハ宿をたてし
是よりも宿さやの隠
けんとも思ひ志て
心をやるとし
山さくら見にゆく花を
花見にゆく友を楽
へてそ告さるハ人の
心わすれたるとし
てらるゝ中そし
俊綱朝臣　此集作者也
俊綱ハ讃岐守なる俊遠子
修理大夫なりし事ハ

みくまりける　菅原孝言
春かすみへて侍る山乃かとまて
おもしろしとゆくこころある
人ハ花見りまゐるとかくさし
はる待つさわれはつかうける
藤原隆経朝臣
山さくら見りゆく花をへてまきを
ひとのこころかなみまわるる（かひ）
きさしきみ比花見ま俊綱朝臣の（此家のうり續世継こそ）
伏見乃家ま人こまれかるり

宇治関白乃子まて哉
原まなりあらひしらし
いまりくその抱りわたきと
うしやまして身
伏見里の宿居の中
ま人身ともふところ
やむきをつる身やき
ねまうと君の編みそ
よめり
小萩さく秋まて
その花見九忘れ
りされハそして夜奈
て萩はく秋まて
ほりハ心みふとたひ
出んとするへし

雑とも志らせうくさしあらせ侍る
皇后宮美作（為仲の孫　資定女）
うしやありつる身ともかるあつさら
かみ乃さとれ花のまゝのま
花見りまゐりかるま須磨野を
やさかるをとみんくとしあ侍る
賀茂成助
小萩さく秋まくほつハおもひ出ん
さり野をやかましまるハ十日と
野志つまて
永源法師（肥後権守致舒子）

さくら花ちらハちれ
風ニハ花の咲よの
あらはハ又花ニ
なるんと思ふ
兼て風の厭ハしき
梅りハとちりて乃花
心ハ明し
何けハよけれバ
安位光宮入りを
よし述懐なりも
これハ何とはなり
心かくことなり

さくら乃はちらハちらなんと思ふより
おしくも風乃いとはしき哉

中原致時（従宮内春宮孫　後ニ大輔有象子）

梅ハとちりて乃花ハ白をせく
柳ハそゝりさかせてしらる

橘元任（従五位上少内記　永愷子能因兄）

何けハよげるとみりゆん山さくら
これそうかるり人りとこれ

一條院御時殿上乃人々花見ニまかる
まく女のもとよりはかりける

おれハおしてハいて
ちらぬまてえせやれ
しきぞかれどおれハお
れてハいてえすき
いうせんとの心も
なしてそれなる
風にまかす桜
となくすまなすか
らそうそさ由とか
よかるへと
上乃おのことも殿大
なり
一宮　祐子内親王也
廿三宮なり　后腹なる
姫宮ハ一女とや

源雅通朝臣（元人左中将　権左中弁時通子）

おほハおしくハいりやまはらし
ちるをすくさすまかり見すてき
あし

相模（元人式部丞貞孝女）

わくくてかすまされやま桜
かせりちらさぬおもきふかひを

後冷泉院御時上乃おのことも花見ん
にまかりて哥よませくるの
一宮乃御方よりとてよみて侍る
なり

一宮するが

「おもひやる心ばかりは
身こそゆかねおもひやる
心ばかりは花を尋て
ゆく人にもおくれまじ
きとなり
今上　白河院
中宮のれうさ　賢子圖
師實公女白河院后
續世繼の書
あくがるるこころなどいふは
身はゆかねども花を尋
ぬれ出る心ばかりは
櫻を尋ねゆく人
にたぐへてやる
と也

おもひやる心ばかりはさくら花
たづぬる人におくれやはする
今上御時殿上の人々花見にまかり
けるを中宮の御かたよりとて人
にかはりてつかはしける
右大臣北方（おほ）
あくがるる心ばかりは山ざくら
たづぬる人にたぐへてぞやる
清水のあたり花おほかる山里に
女ある所にてよみ侍りける

「いまこんとちぎりし
彼女の契りたがへて
よろづ心はゆかずなり
祭主輔親　三位神祇大副
大中臣能宣子　[illegible]
云南院（六条西烏丸）ハ海橋立也輔
親ハ家也月みんため
に寝殿の南廂（ひさし）を不
差（さ）く[illegible]池の方ハ
てのうつりやなかりけん
とよむハ花は[illegible]也
いつまでかわきてをし
心はあさからぬも
ゆきとまる所なかりけるハ
花のあかぬ限なくて

源兼澄
いまこんとちぎりし人乃おもかげは
花乃さかりをすぐさざるらん
祭主輔親
いつまでかわきてをしまし山桜
こころうつさぬ枝しなければ
藤原為言
ゆきとまる所はなかりける
花よりこころのあくがれまかは
こずゑ花をたづねてはふ心をよ

かくしつゝちりぬれハ
ならふる雨のしもとも
山さくらこゝろのまゝに
君ゆかしてハ花のをも
ゆきゝく花をまさしく
まうし心あらし侍りや

白妙ん花乃千やされ
物かゝり枝かきハ居る
ヶ枝きを折り
ちるらんもとの晴も

める

小安

山さくらこゝろのまゝにちはまて
おへさうちちれわくも志らぬ
長承（おこ日）ちかり侍る比新院より山里
乃桜ハいかゝとおほされれハよみ侍り
ける　上東門院中将道雅女
白妙ん花乃千やされこひしくて
おるてさのうきさやまさくらかな
白河院まく花をこくよみ侍
侍ける　民部卿長家（御堂殿息 大納言）

あつまちの人よとて
白河院乃花をみて
これハ白河園ニあかく
花と白やと問人と
よみけるかりとも

南殿桜　禁秘抄云在紫宸殿巽角是大略自草創樹也　拾芥云南殿桜樹者本是梅也桓武天皇遷都之時所植也而及承和年中枯失仍仁明天皇被改樹也云々貞今
着爾もはなのまゝせ
みるかうに花の名やそ

あつまちの人にとはゝや白河の
せきにもかくや花ハにほふと
南殿乃桜をよミ侍けるを（イ桜をよミて）
亭岳頼言（ハ侍曾 雅俊卿猶子）
みるかけに花の名たての身なれとも
こゝろハ雲乃うへまてそゆく
うへのおのこも奇よミ侍けるに齋
心ヲ寄花とうふことをよみ侍ける
大貳實政
まさくらさけるをハすれとさゆる花

孫の教もはなる男
いへるは花の名
と言るわさなりさす
うき思ハ雨上てゆき
て此花を見とさきを
まことに見るもよし
心ハ明なるべし
はうつる白雲なれは
うつろひぬべきなり
白雲なりしまされ
如きゝ春宮坊
花もうつろふなり
花を見ゆきてなるを
心をやりて見る事
めとりつなしてあまる

おうしとも乃津かぬるは
惜（ヲシム）心（ヲ）を読る　大中臣能宣朝臣
はうつる白雲なれはおかりしの
春さへおしくおもほゆるかな

河原院にまかりけるに山桜を見
てよめる　平兼盛
花とえとみゆきなくは見ねども桜花
こゝろをやりてけふはかへりぬ
惑（ル）籠（コモル）山桜（ヲ）とりすてゝとよめる
能因法師

けうもえんの心をおや
さらはくまへまゝる
ねゆきくハ花の見
えさるをかしむな
るべし
うへをきし人なき
心ハ明なるべし
みやこ人いかにとて
この山桜とハあり乃

さくら花ちるハよるにまかせて
夢ならものをおもひけるかな
さくらをうへおきてぬしなく成に
くれハよめる　よみ人しらず
うへをきし人なきやとの花ならは
ふかひそうわらすかきしさかりなる
春きありまりてゆる花ま山
乃さくらを見やかくよめる
和泉式部
みやこ人いくまとゝりて見せもせん

山桜も心細し
人も見ぬやとま
ゆかしうき人
も見まゝ人も
見ぬ宿よりすれハ
花をもてやつすを
身とし
わかやとの桜ハ
何しよりかくれ
桜のひとをもあるしと
右二首も和泉式部
あるかへし
花見にと人ハ山邊ま
心ハ明なるへし

かのやまさくら一えたもかな
（詠しと）
人も見ぬやとにさくらをうへつれハ
花もてやつす身とそ成ぬる
わかやとの桜ハかひもなかりけり
あるしからこそ人も見えけれ（えイ）
（山）道命法師（阿闍梨 天王寺別当 大納言道綱男）
花見にと人ハやまへへ入りはてゝ
春ハみやこそさひしかりける
紫式部

世の中をなになけかまし
花見る折の縁念
なさまくの常
にあらハうき世とて
けをとみけんも
花見てハ身のうき
花見てハ身のうさ
も忘るれハ春
ハかきりとなからて
常にすまほしハよの
らんとの心
我やとのこすゑハかり
外の（コ下二）四方山にまても行
冬とせる心よくき

世乃中をなになけかまし山さくら
花見るほとのこゝろなりせハ
なけきける時花をみて
よめる
藤原公経朝臣（贈内大臣頼成卿子）
仝
花見てハ身のうきことも忘らるゝ
春ハかきりのなからましかハ
堀河右大臣九条家にて遥山（コ上二）桜
あるしといふ心をよみ侍りける
前中納言顕基（大納言俊賢子）
我やとのこすゑハかりと見しほとに よ

こゝ能まゝや
おもひつゝ夢まてみるとハ
思（こゝろ）夢よりて見るを
さハ夢ニこゝろすき
花を見る夢我詞
さきにまハねさめなる
くハしうしりと深く
花をしふ哀れなり
うまさ深き心を含下
春乃うちハちらぬ
おもハぬ花ニ風
をやとしてしたふ
哉よよめる也春の
中ハちらぬ物にて
も風ニやりたきり

よし乃山さくらはさきにけり
ちるとも　藤原元真

おもひつゝ夢まてみつるさくら花
ちるハねさめれあかしりハ
承暦二年内裏哥合によめる（白河院乃御時の承暦二年四月廿八日）
右大弁通俊

春乃うちハちらぬさくらとみてしがな
さてもや風乃うしろめたきと
屏風乃ゑに人花ちる所をよめ
る　平兼盛

さんとの心るへし
花見ると家路に遅く
振人の花しく家ニ
もかへるをきをよ
めハ心ハ明し
一とせりふたゝひ
いとあくハほまれて
之花宴をくあかと
招きてし侯宴き心
よわ年ニ二度なき
まされハ花を
見るにきるとく
よめる也兼盛哥
也

花みると家路におそくかへる那
まちどきすくといもやいふらん
屏風乃ゑに三月花乃宴する所を
まれ人来所をよめる（花盛り酒宴する也）

一とせにふたゝひさかぬ花なれは
いとあくるよハ花をこそ見れ
（長暦元年八月十七日立春宮　寛徳二年正月受禅）
後冷泉院東宮と申ける時殿上
（禄至も）乃をのこども花見んとて雲林院
にまかりたりけるによみて侍り
ける
良暹法師

うらやましもの美人
春乃みやハ春宮をさし
そ乃方乃人〻をもの美
人とこそもの美人なれ
ハ花をおのか物となん
とそ袋草子云一条
院御時殿上人共花見ニ
中ニ或人よする論
山しなの上人にあはれ
て此の歌とや月を
みるらんと
山さくら白雲にのみ
雲にまかふの花に
ちるとおもふ花を
うつろふ心そらなるへし

うらやましはる乃宮人うちむれて
おのか物とやはなをみるらん

通宗朝臣（大弐経平子）後中宮に侍りける時宮は
哥合し侍りけるによめる

源縁法師（俗姓越後守時号越之君）

山さくら白雲にのみまかへはや
はる乃こゝろ乃そらになるらん

宇治前太政大臣（頼道公）花見侍りけるによませ侍らんと
ゆきてまかる　民部卿経信

いにしへ乃花見し人ハたつねしを

いにし乃花見し人〻を
むかし花見し人ハ今ハなし
をたつねハまさしく秘
き年く花見しりとも
おいハ春にも志られぬ
身と年ふりしを
かくおもひたるハ
ほしき年まで花
ゆきのやまをゆかま
又く白雲はすとも
かゝるやとゝし
きこゆるさうかよ
花盛中して庭
の花さこめてもこ
とりなつまとも

をいハはるにも志られさりけり

はしも（尼寺なとにや）尋ぬれハおほつかなきは
ひ侍れこやよひハかふ白河よまうり
けるとききてさくらをゝらせつとを（それに）
ほりたるハといひをこせて侍るよ
よめる　中納言定頼（大納言公任子）

さくらハなさかりなれハふる里の
むかし乃かともはまさりけり

春花誰家（タレカ）といふこゝろをよめる

坂上定成（明法博士主計頭範記子）

よそなから惜き桜の
よそなからみる花なれは
惜き花の匂ひまく
近くも見まほしきに
誰人か我宿の花とも
し見らんとうらやま
しやとの心也
春ことに見れともあかす
毎年ことにも花を
見なめかく覚る八重
よふ花の去年より
咲まさりく去くやう
らく思ふす覚るまゝ也
高陽院　拾芥云中御門南
堀河東　南北二町　南

よそなからおしき桜のにほひかな
たれわかやとの花と見るらん
（イ我宿の花と）ことところ花を見るといふ心を
よめる　源縁法師

春ことにみれともあかすやまさくら
としにや花のさきまさるらん
（於高陽院行幸あり　頼通公の家）高陽院乃花盛に忍ひて東面の山（高陽院の築地）
乃花見にまかりて侍れハ宇治前太政大臣（頼通公）
聞つけて此程いかなる哥かよみたるな
と問せ侍れハ久しく田舎に侍てさる

一町後入賀陽親王家
世乃中をおもひすてし
遁世乃身なりし我も
いかん花を見て高陽院
山の東面におもむきて
見とれつとなり見えしと
身乃花故浮世を思ひ
らくも思ひ出まし
世中よの　饅頭
哀なるともなへまし
かゝはなちゆきよの
被出流太政大臣のか
けにみえてひし
よそにてもわれ忘れ
みかつけものなとひ

へき哥なともよみ侍らてけふかくなん覚
ゆるとて読（よみて）侍ける　能因法師
世の中をおもひすてゝし身なれとも（なから）
こゝろよわしと花にみえける
是を聞て太政大臣いと哀なりと思ひて
かつけものなとして侍けるとなん云傳ふる
みなさらまほしかりしもなるよしかたりける
ちまたの名けちの筆にとゝめいて
能因朝臣乃ことをもつらねける
よそにてもわかれめやさそひける

乃ちりかゝるを叱し
てし苔の袂ハ世捨人
の詠なるのせしも
山寺住居を三れバやこ
あふこゝろとものてよ
冬乃白河のひえの谷
まそ心にかゝるへき春
乃くるゝをとめ心頃と
高砂乃をのへのさくら
童蒙抄云高砂とは山
乃惣名也本文ニ高砂
長成山とよめり播磨
乃高砂ハ所の名をの
へとハ峯上と云万葉
にハ出る云旨云

うけのよそとりちらくからし

高倉乃一宮乃女房花見に白河にま
かりけるに詠る　伊賀少将（又伊賀などいふ）（維敏臣藤原氏本女　後冷泉院乳母）
あたゝとをも乃ゆかりをそ思はまし

しら川乃花見んさそはせて（後二条関白師道公于時内大臣）
内乃おほいまうちきみ乃家にて人〻酒
たうへて哥よみ侍りけるに遥に山桜を望
といふ心を読る　大江匡房朝臣（信濃守成衡子　号江師）
高砂乃をのへのさくらさきにけり
とやまのかすみたゝすもあらなん

高砂とハいかにもたかき
る山をさして云花の
咲るをさしてよまん
とやまは山の麓に立
そといふ是を外山と申
さい心すゝめり
吉野山八重たつねの
八重立峯の上にあれ
花のさかりかくるさ
ま風情面白きなり
かりひとくるまゝ
庭桜ハ庭の桜也
散くほと舟かさる
ちらハ庭にこひ跡を
すハあらしとそよみて

遠山桜といふ心をよめる
藤原清家（播磨守能永子）
吉野山八重たつね乃しら雲に
かさねてみゆる花さくら哉

田舎よりまかりてのほらんとしけるを
家乃花を惜む心人〻によみ侍ける
によめる
藤原通宗朝臣（[illegible]）
かすひとをとあやし庭さへ
ちるもく乃のちハみてすかせハ（花下忘帰因美景　白氏文集）
花乃ちるまにかへらんとそ思ふ

やりかへる雲も
ふく風も霞におし
むちて霞に埋りし
もようによけれハ花
の行ハ霞によく
たく人もこりとそ
ちるまでハ旅ねを
花のちるまてそ
そなし木のもとよ
旅ねしまへんとて
帰りなバ花の名を
立るそはんとさ
東三条院　大入道兼家
公女　詮子　円融院后

この心をよめる　良暹法師
まよ人をやらまし何し山さくら
ちらくかりしもみけまし
（モト、おほ内大臣能長公子）基長中納言東山に花見侍りけるに
ねの衣きてける法師きて誰とし
らせでよませ侍る
加賀左衛門
ちるまでハ旅寝をせなん木のもとよ
かへらバ花乃名たてなるべし
東三条院御屏風に桜人山の

一条院御母女院の姉
ちるをみてのちや
此ハ云うるき物る
ましく花の内さ
まよりてちりと云
ねべきよ家居く
やゆんとも能の様
人の心ヲ御座せん
わかやとは咲ちるま
心消しきし花撫
のこし

桜をみる所をよめる
源道済（能登守方国子　信明孫）
ちるをみてのちやゆかんふるさとも
わすられぬべき山さくら哉
おなじき御屏風に桜花
ちるところに人のきたるをよ
める
わかやとり咲ちるまでさくらは
かへりハ春もおしまれぬべし
大納言公任　花乃さかりなるころん

中務卿具平（トモヒラ）親王
天暦帝御子号後中
書王六条宮とも申
春もみなちりなん
花のちりぬれハ
音信のうつとなし
まつるへきよしの心也

ひと〳〵を待しさけれハ
中務卿具平親王
花もみなちりなんのちハ我やとに
なにゝつけてか人をまたまし

三月三日もゝの花を
續漢志曰三月上巳官民
皆禊飲於東流水上
宋書曰自魏後但用
三月三日不復用巳也
みちよへてなりける
西王母漢武帝に桃実（もゝのみ）
に七枚なりて三千年
に一たび実なると云
又童蒙抄にいはく
ハ三千年にひと花さい
て百（も）の名をいふなと
かはさけハちよまてく
あるすなりし心也

後拾遺和歌集第二

春下

三月三日もゝの花を御覧じて
花山院御製
みちよへてなりけるものをなとてかハ
もゝとしもはたなづけそめけん
天暦御時の御屏風に桃の花ある所
をよめる　清原元輔
かはさけハちよまでくかさせとてのむ
花しかすらし春をこそしれ

世尊寺　拾芥云一条北大
宮西（ノ）謙徳公家本主ハ
貞純親王この南ハ桃
園なり於城に侍し
ふるさと乃花れ物いふ
桃園のこと謙徳公を
とれ問語られハ古へを
よめるなるへし心ハ通之
桃を物いはぬ花と云
蒙求ニ云史記ニ桃李（タウリ）
不言（モノイハ）下自成蹊（シタオノヅカラミチヲナス）とあり
（又不言ノ履先ニ笑　朗詠）
さくらハ何かねあまりに
ちらすハ人も物いはすや
何の人ありてもくと

世尊寺乃桃乃花をよめる
出羽弁（[illegible]平季信女）
ふるさと乃花れ物いふよなりせハ
いかにむかしのことをとはまし
永承五年六月祐子内親王家哥（後朱雀院皇女）
会し侍るに桜乃花れ歌を人ニ読（彼家歌会の歌也）
侍りけるに読る　堀河右大臣（頼宗公　御堂殿息）
さくら花何かあまりにゝほふらん
ちらすハ人やおしまさらまし
野辺ちるも
内大臣　師通公

あかぬ物かれまてこそ
乃心なるへし
かりそめもちるかハ
花を物いはぬ山家に
て明暮見る心をよめる
なるへし
よとゝもにちるとも
世ハあきぬ物見れハ世を
こゝろしるしとあり
本歌こゝをよせてと何
但家集にもよとゝも
にと何てあり之る
心須見し
ちるかなまちてさきさ
春をかたむも花物を

かりそめもちるまとしらぬ花ゆへに
ちるハやまへをすみかにそする
天徳四年ノ哥合ニ（村上年号也）　平兼盛
（イまとせま）
よとゝもにちらすもあらなんさくら花
あかぬこゝろハいつかたゆへき
大中臣能宣朝臣
ちるかなまちてさきちるをみよ（うつろひイ）
春をし人乃かはしむらん
屏風乃絵にちる乃花れちる

かりそめにはちる
うとく遊しまでし
山里はちりはててぬと聞き
しふ人あるはなれあり
き故ちかくて花を聞き
花のこ入相のかねとの
思ふべし
やうく待わびたる志
り　撿使をそへられ
思ふべし
いつきの和かて　斎氏
斎宮上京あらるや
斎宮は天子一代り
一度豆の伊勢とくだり
しめゆひしそのかみ

と聞しそらかなる雨をよみて待わたる

源道済

山里はちりはてぬとき花ゆへに
しれどもあかぬ人をまつらし

太神宮乃やうく待たる事あるに
伊勢にまたくたりて待るにはれきき
の和か待くかの家人もあくて桜
いと面白く咲けれはよみわたる
よみ侍る　右大弁通俊

しめゆひしそのかみならはさくら花

歌の意ハりて山桜
を行しかひし當時
あるハ人とよまれたるや
されちるもわかれて
こゝろ安き物をとる
しそておもふべくもなく
後よ表すれとの意
さくら花みえてねまで
志賀の山越乃道も見
えぬまで散るの意
桜ちるところよ
隣より花なき宿
よ花の散れハ隣よ
いとふ風の嫌きと
花の陰してまくかき

をしまれつゝやけふハちらまし

山路（ヤマヂノ）落花を読る　橘成元

さくら花みちみえぬまてちりにけり
いかゝはすへき志賀乃やまこえ

隣の桜を読る　坂上定成

桜ちるとなりにいとふ春風は
花なきやとそうれしかりける

花乃庭にちりて侍る所まく
よめる　清原元輔

花乃陰しくまくわきこよひかな

云けるかきこと哉の
字をうつしたる左の
事とも後居せるよしは
唐錦とうつくしき
物をうつせる例を
元由にて花錦を
作りぬ心をよみ
ゆむとはちりもとまり
ちらぬも身ひとときいさし
ゆくて花はあかぬも
とゝまりすゝめると
心ある物をこそしへ
花を見るかよ花の
ちるをとゝめ　とれは
咲く物をおしむと

みきりをとゝす庭と見えて候

承暦二年（白河院御事）内裏御時の歌合に
桜を読侍る　藤原通宗朝臣

をしむにはちるもとまりてさくら花
あかぬこゝろうときさへなかりける

題しらす　永縁法師（肥後権守敦輔子）

心ある物をこそ知りへやまさくら
とはねさわせてちるをみんかや

三月いつかに花乃ちるをとゝめとこそく
よみ侍る　土御門御匣殿（条院后宮女二条院皇后宮女房）

うらやましいかなるやむ
世の迷ひとなる身を
とく死ぬ事もありくも
すくよ花のちるをとう
やむ心おほれかつきかや
大弐三位　右衛門佐宣孝妻
母紫式部　大弐（成）国章ガ女
後冷泉院御乳母被称名
ゆくりせすおすへつらき
花の心づくしちりまへは
うら風のもちれたとし
年をへて花に心を
をしむてとゝまるこそ
あけまて年ごとに牲
こゝろすさ花にゆるさせらく

うらやましいかなる花のちりまよふらん
物おもふ身もしもせりはのこりけく

永承五年六月五日祐子内親王家に
哥合侍に読る　大弐三位

ゆくりせすおすへはつきはててそする
心とゝまつるましなけきこそ

題しらす　中納言定頼

年をへて花かり心をくたくかな
をしむりとまるはなけきを

家乃桜のちりくるをみてよめりけるを

ほまるへし
こゝろこれぬ人にみえよ
此明し家の桜の花
こいふ羽出しくらく
きこし侍り
ゆくとしもせきとゞめ
此明し花ちれ宮も
なかりし　杜子美詩ニ
一片花飛テ減却ス二春ヲ一
粟田右大臣乃家
道兼公摂政兼家子
正暦五年八月廿八月
任ス二右大臣ニ一号ス二粟田ト一

よめる　大江嘉言
こゝろこれぬ人にみえとくさくらはる
ゑ乃こゝろありまのせくらやる
白河わたり花乃ちりくるあはれなるをと
よみ侍る　土御門右大臣（師房公　具平親王子）
ゆくとしもせきとゞめえや志ら河乃
あとゝもみえてもゆきなる
粟田右大臣の家にて人このみの花をお
よみ侍るによめる　藤原為時（刑部丞雅正子　紫式部父）
とゞまらぬもわかつき花はさきすなるか

とれくも咲つさ
身代異遊ひの法桜
あれもし三まさ桜も
桜りハ咲されハ身代
自とも咲常あらく
かけむへまするゝ桜く
も身代富をえ
まくもとひけとも
風乃れ咲くるはなく
庭に萬り花をふ
風は吹掃ふるを
切にやるへし
野へこれハ野生の花
重葉称まさりてま
こハあの名よハおて

身をかへたりとも　おもひくるゝる
庭のさくら乃おほくちりて侍
けれハよめる　和泉式部
風たにもふきはらはすは庭桜
ちるとも春乃うちハみてまし（みとり）
三月をはり野乃をゝみ
侍る　藤原義孝（左少将　謙徳公息　九月）
野へ乃さとはやよひ乃月乃はつるまで
まさりわかさきさいてはなのまゝ
つゝとよめる　和泉式部

春乃七草をとりて
いつしおもひそめける
背子（セコ）ハ夫也又妹也
古風の詩也万葉ニ春
山乃躑躅の花ほくら
らぬ君ハ思（エ）ほゆよ
とよめり
わきもこかれ手ゆの
吾妹子（ワギモコ）ハ妻をいふ也さ
かれハ別深き
画図 播磨ノ講師
寛和ニ氏人 愚案
分寺講師延喜式ニ
萩の花さかりゐれハ
こゝろわきからや

咲にしおりとくゐるせこほし
それそかゆめ乃いろかゐみえれを
萩原義孝
わきもこかそれそかぬめ乃さとこえて
あけさされぬるいそはしゐるを
月（を完乃みて）帰とい不ありなりて之師恵
告かともに庭乃萩か花を翫ひ
て読侍ける 大中臣輔宣朝臣
萩乃花さかりとなきハ庭乃面ま
おもひかけぬそゝる

むらさきハ八（ヤ）入（シホ）深さ
女郎集ニ池乃萩乃
かきさるをとなり
八入ハ一入ニ入をかて深
く深し紫深きハ
灰をさせハ池またひ
さしそし万葉ニ紫ハ
灰さす物そ椿市（ツハイチ）乃
やそ乃ちまたにあへる
子やたれ 此歌にも
萩のをわらくさき
落紫わらを
古今の御衣服をそよ
紫の猶をなすまし
みなこともゝ紫かく

題しらす 女官女郎（式子内親王女房 村上天皇女御）
むらさきよやそわかれるる萩乃かゝる
池りをひきすゐのうつきくゝる
源為義朝臣（陸奥守 播磨守國子 信濃孫）
萩乃えをおりてかさせハこむらさき
わらとゆひ乃いろやそめん
永暦二年内裏哥合萩花を
よめる 大納言實季（中納言公成息 公安父）
みならくもむらさきみくにゆかれ
きし乃岸根りかゝる萩なれ

心明し

すみのえの松乃千とせ
心ハ明しいろふかくなる
三本ふるそへと作り正
本なみの(?)ゆる義
ふ明らかれハ日く
名とのみ井手より
井手へ名をさそう
ゆし出雲もも室
やハさうね八重咲て
おれハそへとめんとも
沼のよかゝくらへり
むへし八宜の字むの

武江て寒盛近江ちかき侍るゝ時に弄ある
まく弄合せ侍るゝに藤花を読
侍る
読人不知

すみ乃江の松乃みとりもむらさきに
いろふかくかゝるきし乃ふちなみ

題志らす
藤原伊家（光中安 周防守公基子）

名とのみ井てなくとゆしこの作るに
やへやも咲ぬ山ふきの花

大貳高遠（三位）
従三位安敏子

沼水にかはつ鳴くなりむへしこそ

心しハ助字也（明し）
沼乃ハ池乃ことゝ同
弘徽殿女御藤生子大家
教通公乃むすめなり
隆信の続世継十六に
みかくれてすたくかはつの
八雲御抄云みかくれて
如万葉ハ水隠と書後云
ふかのかくれてと云之云
すたく多集と書
つまる也 万葉みかくれ
後とおもふ家八八雲乃
作法不乃性も読悪
よ薄もさつて宜也
言葉ことさく除れ

きし乃やまふきさかりなりけれ
長久二年（後朱雀院時）弘徽殿女御家哥合に
とよめる
良暹法師

みかくれてすたくかはつのもろこゑに
さはきそわたる井手のうきくさ

題しらす
藤原長能

こゝろしもとはへ津里野への百千鳥
のこりすくなきたそかれのやいはの林

法橋道命法師乃侍るよふ（法橋ちうく）
らひりまかりわたるよふこまの

今すこしの残せるを
是ハ野べの春をも越
こととらけく百る
ゑハ古今ニゑし
わすれじひとりきく独るハ
嘆こりゝけく
我一人ききるゝ覧
意ニハよのつせでを
やこう玉へれかな
あまさの人きくに
誰をとかやらんあね
ハ我一人のミも羨を
もし嘆子ある同ニあと
かゝきろ子すこひも
心得し鈴寺子云良暹

ゆき侍りけれをよめる

法圓法師（長保氏の子）

わすれじひとりきく梅のハよふことを里
ゆくこそすくハ春のせさゝよし

三月晦日郭公乃なくをきゝ
てよみ侍る

中納言定頼

かぞへきておなじ日もかけぬまるけそ
うらみまなく初音きゝつる

三月盡ことよわするを惜心を

の座乃集子より云件
評　山里のかひもあ
るか郭公こゑも
まちて初音きゝつる
此哥ハ拾遺集ニ載
乃哥より末同じ也
りせよ鄙るハと
過葉ニ云着と年まと
其もとかくる一字を
心各別ゆむ無ハるべし
かくきすすのす大
春ハ郭公鳴後ハあす
あれどもこひ鳴き
夜ニ寿るそれも苦
ゆくまをふもあへきるゝ大伊のハ郭公まもの鶯に情さそ

人々よみ侍りけるによめる

大中臣能宣朝臣

かぞへきてあかずハあまりすぐめく
くれゆく春るを見もくこそへん

三月晦日乃日おや乃そうり
まかりてよめる

永縁法師（左京所弟之子）

なすひ出ることの千ほけきめすきそく
みすゝりさへわすれぬる那し

よく思ひとゝかくこゝろえさるへし
おもひやるへきのみ　歌乃基これハ悲傷乃おもひたゝよ（ひ）とのこゝろみ
春の別をしけしと見まらするそのおもむき歌の別にこめられしなるへし

後拾遺和歌集第三

夏

四月ついたちの日よめる
和泉式部
さくらいろにそめし衣をぬきかへて
やまほとゝきすけふよりそまつ

四月一日時鳥をまつ心をよめる
藤原明衡朝臣
きのふまてをしみし花もわすられて
けふはまたるゝほとゝきすかな

さくらいろにそめし衣を
心明し時節のうつりかは
るあはれさをしりへし
明衡　前山城守敦信子
卒治暦二年一ニス

きのふまてをしみし
心明し

はゝそ原　古曽部と
袋草子云能因ハ古曽部に
すみ毎年花盛に上洛
出て宿ス大江公資カ五条
東洞院家ニ件家南庭ニ
桜樹あり為翫之ヲ
観童丸とて童一人相従フ
公資の孫公仲ハ常ニ云ク
我等あへすそふれハ歌
いよむそと諷諫けるとき
わかやとのこすゑの夏ハ
伊駒嶽河内也古曽部と
さしむかひたる方ニ直也
しるさるゝ稍夏ハ六月
とも云説あれとさ乙秀ハ只

はゝそ原こそへと[illegible]かりくよ
める　　能因法師

わかやとのこすゑの夏になるときハ
いこまの山そ見えすなりぬる

冷泉院春宮と申ける時百首奉
りける中に　源重之

夏くさハむすふはかりに成にけり
野かひし駒やあくかれぬらん

題しらす　曽禰好忠

榊とる卯月になれハ神やまの

首夏乃部立ふ見れハ
新樹乃さゆかや
夏草ふむすふはかりに
夏草ハ駒を放ちて
放されハ野飼の駒も
あくかれんとし
榊とる卯月なれハ
賀茂祭云神山とハ
加茂乃後なる山を云
也ならのはかしハ古き葉
と云也故人をとらふ人
とも万葉によめる
やへしける葎の門の
葎深き門ハ荒涼く
てさえすけるをとも

ならのはかしハもとつはもなし

山里乃水鶏をよみ侍りける

大中臣輔弘（神祇権大副輔親子）

やへしけるむくらのかとのいふせきに
さゝすやなにをたゝくくひなそ

やまさと乃卯花を読侍ける

藤原通宗朝臣

ほとゝくる人もなき山里に
我のみ見よとさけるう乃はな

民部卿泰憲近江[illegible]に侍ける時

ゆふさハ艶にも見え
まさりや乃やハ明ま
侍らしらるる今
心ハ明し
志らまゆ乃をさまく
色も心ハ明し
月かげをまろまく
卯花の白さの唐よ
御それハ月影を粂
て咲るとよめり初夏
明ハ夏明の定ちらす
せめよし
卯花のさくるうちあ
古にて路とひらけて
よめり心ハ明し

三井寺にて哥合侍るるよ
卯花を詠る　よみひとしらす
志らまゆ乃をせく立とまつるハ
うの花さくるかきねなりけり
題しらす
月かげをいろなくさくる卯花ハ
あけハあまりけの心ちこそせめ
ある哥合志侍るるよ卯
花を詠侍るる大中臣能宣朝臣
卯花乃さくるあたりハ時ならぬ

さりみ　作者部類云源頼光女入道一品宮女房
袋草子云大江公資妻公資為相模守依之号相模本名乙侍従
見わる世ハ波のたちまし
玉河ハ宿ほとくや
卯花白波よ似されそ
波の志らもとよまり
卯花乃さくる
色ハ井せきれ波と
見えて白波の音
の川とひらけけり

雪みるさらく乃かきねとうつ見ける
（後朱雀院皇女号六条斎院）正子内親王乃絵合志侍りるなかねの
（トクシ）さうしに出侍るるさりみ
見わる世ハ波乃志りとみゆけてなわ
うの花さくる玉河乃さと
伊勢大輔（祭主輔親女依号伊勢大輔）
卯花乃さくる信わハ志ろ波の
よるさ乃川水の世きとうつる
卯花をよみ侍るる
源[illegible]澄朝臣

雪とのみあやまたれ
山里の卯の花垣の雪
こゆゑは冬ごもれ
りとぞ見ゆるらし
元慧　作者部類云對馬守
荻茂規子大山寺別當
わりやとれかきねなるら
卯花は方も同りれ
翁前をるとこそ
のきほれとし後拾遺云
元慧ハ大山別當之雜
家詠此哥而上洛之時
於山崎邊下女ノ曰哥ニ
唱之元慧聞之拭涙ニ
かゝしきとす紛れ

雪とのみあやまたれつゝ卯の花は
冬こもれりと見ゆるやまさと
（偈首拾遺云本寺地蔵）
はら乃大山ちとふ示まく奔合出
待ちるま譲る　元慧法師
わか宿乃かきねなるらかしきと
こゝのさうもおもしろき
縁志ると　本名亮忠康
花山法師致行子
かゝしきす錢ハまうてうなる
おもふことのみつくつなれそ
四月はしめつ乃日右近の馬場り

思わするまよ八子宮
爲ん待ゝ宮てる
じまそ程るを
やみぬ待ゝは待んを
乃思ひるゝし
かゝしきすれね
かれとおそく出づ
きなて待る室る幸
ゑうまさのとうちも
ならさらの宿や
こゝわのきつあわき
京まくハ物まれく
こまさ子秋の條
果山まくハ宮鳴
らんゝやまとの

郭公きゝそてまつ待ゝるに
かゝるすてあまき待ゝとかたれ
堀河右大臣　頼宗公
かゝまき若ゝ利ぬハかの名のとて
きゝすそさてや宿りゝくらん
尼命法師　山ちるま待ゝるまはゝそ
しるる
荻原尚忠　春宮少進　加賀女若信子
こゝわきさの面かしきとおもひ乃
山わしきをいゝりあくらん
あし
尼命法師

字やし山子親とふ
いへり
行ひき乃山かしきす
山深き雨れいて親
ほそきさき太さき多の
言もせすまし大谷
能とかの武もゆるね
田ふ山乃かすき心に入
いふへんとよめり
またの峰き 尓の曙月
きのふ乃使の中お将豪
人合すの嶺さし枕紙
云みて雅に尓の峰き
きのかやるの峰（ゆゑ）山氏
天郭山へと當時と傳

行しひき乃やまかしらすとのくらのます
おかくとかのこゑいきこしを
（後朱雀院皇女）祐子内親王かもみいつきと申しける時
（名紀伊と申す）女房あまく侍るを集てゴ好宗
院御時秋院て侍る人のもとに
昔を心に出く まつわの嶺さの月
（カンダチ 神すらから）神鏡をきくる皇后宮女紀（源資定女）
きのまやるのくみ山乃郭公
おもしむし乃おもしこゑのと
尓乃使ひたくかんよるを侍

てこ昔我秋院ﾆ文
仕せし比同し郭公の
こゑうきゝのゑ引しきを
也ある七五忠すりや
尓乃使ひたく 梶袋
尓まは典侍むゆゑと
枕草中云内侍のすけ
こつひてわく内一条り
若氏使ゑて不出るも
（オモ）田さしうすや家るこ
かくきすあつて
郭云ハ我名を嘲れ共
名聞とさこ人を詰し
名誉の中よ本意の品
時ねハめく人ハあまる

ゐるま人こかゝくとうつひにそをまひ
侍るを大貳の長房て侍るまけ
まハつかりける 傳お典侍
かくきこともあのり きくこすきくるあれ
霜ねぬ人ハ津おや風まし
四月もり こゑ氏湯のかゝり侍
く時鳥をきかん叫つるに人のひとと
こせく待八大中良能宣朝臣
叫すてまきするふらん郭公
霧川ねかりわまとハ山ちこてん

まだとはぬ人は無や
やんとも
心捨てきゝけるかん
心ハ明らかも
この比ハねくのあたり
都に来て昔此声
しきりに鳴りけん
こゝ四条小路居士て
かねもせわりなかせて
のこり待よみけるや
よひのまハ中々にて
夜のみのしらく明て
まだ鳴と兼て鳴ね故
後夜起明ければまで

いにしへを忍ふる代々の思ひは
郭公をきゝてよめる
喜撰法師（太宰権帥二首上の法師に）

この比ハねくのあたりしきりす
声ぞしるやこれ此地はわかせよ
鳴声まても
橘資成（伊予守義通子 正五位上言家）

よひのまハ中々なかす郭公
ほのかにとかくねくらしらせハ
（後冷泉院年号）永承五年六月五日祐子内親王家
歌合に読る　伊勢大輔

きゝつともきかす
いかのひとこゑより
みきゝのわかりきゝ心を
ゆるかすまぬ也
鳴ずに行けハ過て
信田森和泉之国
明るも
夜乃声ハさてもや
さけりても我只
一声鳴てに二声と待
鳴とも二声鳴ても
ねぬを向ふ事と
ねぬよこそ鳴つれわ
鳴れてもうき悪る
る一声に鳴もと待て

きゝつともきかずともなく郭公
こゝろまとはすよはのひとこゑ
能因法師

鳴ずまはゆけハいらねてきゝつる郭公
声のかれぬのこりありけり
藤原兼房朝臣（中納言兼隆子 号讃岐守）

夜乃声ハしのぶやねねと子規
わさこゑきかる人ありとそや
小安

ねぬ夜こそかずはかぬれ郭公
きくもうきひとこゑぞかは

揺りくれは野も
きこえすね乃声も
ほとゝきと
あかしなけ乃月に
月に啼出つる其の
空只一色の外なきよ
月さへ有る八子規乃
行方とハしらん物をと
此講八雲抄に長元八年
五月ニ此講ハ後花氏
公家と両殿二組との講
あらぬ物てもちよも
きくてもきこえても綺
まよしとね出年と
といやハなうてはなれ

祐子内親王家にて歌合ありて果て
のち人ゝおなし題をよみ侍り
ける　宇治前太政大臣（頼通公）
ありあけ乃月たにあれや郭公
たゝひとこゑ乃ゆくかたもみん
宇治前太政大臣批講のち歌合せ侍る
に郭公を講る　赤染衛門
あかぬよもあかしもさつ小郭公
まれにてや（行）すきいやをね（ま）らく
夜もすから待つる物をかなしきす
又ぞよりあらてすきぬあなるに

八せし宿れすとも
よそすく待つる物を
とふ前待ちかなく二
こゑも啼きかくれハ
あつまちのおもひてよ
東よりの名中乃云ひ
出ハそこと似る空
老曽森近江

きゝつるや初音なるらし
その証人ハ常ハき
待ちれと神なきし
よろこひよかくよめる
不審のりや

相模守にて乃ほり侍りけるに
をいその森にて郭公を聞て
よめる　大江公資朝臣（兵部権大輔 薩摩守清言）
あつまちのおもひてにせんほとゝきす
をいそのもりのよはのひとこゑ
郭公をきゝてよめる
法橋忠命
きゝつるや初音なるらし子規
をいハねさめそうれしかりける
（一条院年号）
長保五年五月十五日入道前太政（道長公）

いつことゝきゝさへわかす
只一声乃おとすれ
きゝし心まよひはなと
ゆふ鳴しもとかにゆ
ねすさりしとそ
郭公よかくこそ
ねさめぬハ待けるのそらに
あさましと
ほとゝきす声ありき
心ハ明し夜今ニ拙か哉
まゝ恋きかせてとを

大宮家哥合に遠聞（ハルカニキク）郭公といふ心
をよめる　大江嘉言
いつかたときゝたにわかすほとゝきす
たゝひとこゑのこゝろまとひ（よひ）に

五月やみかゝりかのそらにはへ
しける　道命法師
郭公よふかくこそおもひねさめ
きゝて乃のちもねられさりけり
ほとゝきす声ゆかしきにゆのこう
梅か香ひとれとりところなる

るまよさくひそてるねき
心をよめるのや
おかやけ乃ゆふくれにまかり
叫こまかハをそれの
空こうハ勅勘の后
ひとこゑもきゝつるかりし
おまくハ稀なる子規
ま山ちかくハ稀もとと
もまかくこと勅勘
乃想ひことよめるし
郭公きなかぬよひの
来鳴ねかもいふ者
ゆかせハ待あかさけれん
きれハぬるよもいへハ
いかん物をとの意成

おかやけ乃ゆふくれにまかりて山ちかき
侍るより郭公をきゝてよめる
律師長済（東山宗組子）
ひとこゑはきゝつるかりのほとゝきす
さもうらく君とちかはにかなるらむ

子規をよめる　能因法師
郭公きなかぬよひ乃志るからハ
ぬるよもひとよあらましものを

大貳三位
またぬよもまつよもきゝつ子規

茅ま能周云郭云ノ
言弄ハ五首之両相加歟（他本）
周弄ヲハ六首ニ作之
郭云さゆらぬし
吊案之彼五首哥（五二）
何ゆゝや乃無貫之が書ル一
趣に叶る古の首ぬ。公忠
が山海の首くの。兼盛が
曠ろけて人のう鳴る。
宗方が云う山乃
郭云。道細母の哉人
ねて待つめやう衣そうつ見む不審（とも袋草子）
まうね衣もまつよもきゝ川
ねくの手やんハまつしん
まうそもさのつうきうぬ貴るしくて

花よりも乃まろにはつゝあそ　小矣

ねくの手やんハまつしんかくさす

挑なすよ十とハきりぬあそうあき

早苗と読る　曽祢好忠

千やまかりかはハさつきに成よりり

いうけやさるへおひこうすれ

花橘ハ郭云の帯る挽すれハこゝ消し

ねくのと人ハまつわと挽之ハねつれねそ

千やまかりかはハ童蒙抄云千や和まかとハ田をも苔も云こう
すれとハ何ゆうへる
と云し
根合　端午よ八九首
乃菖蒲を根の方
きを賞すれハ千根
をあはせてあるとよ
よりせての哥合也
ほとゝきすれよ月も業ね
早り　ここハ必ずも（菜花抄 池推総ニ有）
ほそれハ三川の宇き
義量御牧山鎚渡の
通し牧にてる業よ
との五月雨の

永承六年五月殿上乃根合よ早苗

をよめる

藤原隆資（武蔵守　里　左近衛少将）

ほとゝきすうつきよもれぬかはなとゝみみ

やまとのさゝへとかもとてねかり

宇治前太政大臣家よ批講の時哥合（七一）

待つ不及月句をよめる

待子

ほそれハ三川乃千まのえれまさる業よ

おもの千すひゞも何しもうおりよ

晴るゝまもなきを云也
鐵草子云此弁法出ル
ヽ時殿中鼓童（コドウ）及舞楽多
これミヽ

五月雨ハ見えし小笹の
浅香沼 深き五月
雨に小笹原も沼乃
ごとく成るを
はれてとはまた経
心得し

五月雨のそやむ
八雲云庭たつみ庭に

宮内卿経長の桂（カツラ）乃山荘にて五月雨
をよみ侍る　藤原範永朝臣

五月雨ハみえし小笹乃原もなし
あさかの沼の心ちのみして

橘俊綱（トシツナ）朝臣（脩理大夫 讃岐守俊遠子）

徒然とおとたえせぬハ五月雨の
軒乃あやめ乃しづくなりけり

叡覚（エイカク）法師（大和守宗孝子 俗名信経）

五月雨をやむひもきかぬねや
ふるさはゝのみずかさまさりつゝ

しめりふるの心地濡（ニシミ）
の字ある乃大良く
五月雨をやまして
あやめ物かはるゝ道
香をとめてこそ人合る
拾遺思へども猶すき
めぬあやめ草かける人も
乃ことはの情しさ袖掛
云菖蒲ハ香高きなれ
なぞしまさめすまじと云ある
不許容（サルヽ）とすまめすと云
也愚案此歌ハかくながら
しきりと人かをとめそ
詞よ物の香せれば香さ
はしまと江乃かこれ

五月五日しめやかなる雨のふりけるに
よみ侍る　恵慶法師

香をとめてとふ人あるをあやめ草
あやしくこまのすさめざりけり

永承六年五月五日殿上乃根合に
よめる　良暹法師

はしま江乃こもかくれさへよそなれ
ひくるあやめ乃ねまくらなるかな

右大臣中将に侍りける時家合し侍
けるに侍る　大中臣輔弘

筑摩江ハ近江にてあやめの
根乃なかきは江の底
深きと云ることを
ねや乃うへに根さしとゝめ
淀野を尋ねてよ
寝殿ハ閨のつくり
かやうに閨の上にあやめ
根をとゝめよと云ハ是も同
しことのあれなとゝ
けふもけふあやめもあやめ
遠比侍りし宿とも見えね
と云る詞をかくし
さみたれ乃そらなつかしく
心也

ねや乃うへに根さしとゝめよあやめ草
たつねてひくもおなし淀野を

遠比侍りける所にはなれはへりて
わかれて又乃とし五月ある
よめる　伊勢大輔

けふもけふあやめもあやめかはらぬに
やとこそありし宿とおほえね

花橘を読る　さかみ

さみたれ乃そらなつかしくにほふかな
花たちはなに風やふくらん

むかしをハ花たちはなの
橘のかハむかしを思ひ
出るものなれハ世捨なく
なに連縁して思ひ出さし
おともせておもひ
にもえて火ともすの
光りを発してよわ
と鳴虫もえとふと云
ひるをもゆる蛍と
蛍の上をゆく
とのほり人の云
の上へと進て云る也
比ゆふかくる星の
蛍と見ましおや

大弐三位

むかしをハ花たちはなのなかりせハ
なにゝつけてかおもひいてまし（いらつき）

蛍を読侍る　源重之

おともせておもひにもゆるほたるこそ
なく虫よりもあはれなりけれ

宇治前太政大臣卅講のゝち歌合し侍
るに蛍をよめる

藤原良経朝臣

沢水に空なる星のうつるかと

まつ〆し明くるも
ひとへなる蝉の羽衣
胡曹か云　蝉の羽衣ハ
うすきもの也　夏ハ
衣の下る（思案）アリ着るに暑
きをうつて涼し
夏かりの玉江の
和名抄に云玉江ハ
越前也芦ハ夏刈物
なるをとらかまよ
成し芦を刈てつゝ
鳥する上にまかれ
むれゐるし　神仙抄
云此哥ハ源重之か
百首哥云　夏刈の

みゆるハ我身乃[illegible]
[illegible]ても　能因法師
ひとへなるせみ乃はころも夏はなを
うすしといへとあつくそありける
源重之
夏かりの玉江のあしをふみしたき
むれゐる鳥のたつそらそなき
さねのうちて
夏衣きるてかひの柳かけ
すゞみきつゝすゞしかりける

萩乃古枝も枯りかむれぬらし鳥ハ完りやはらふらん　此哥ハこれ
古今集に夏芦へと刈るおとよ鳥ハおぼれぬるをよめることこれハ
夏萩をかゝる古枝の枯られハ今ハ秋よ如く夏はれぬ鳥もし
今ハ夏まかはるらんとしてうそうるらんと八むれぬに江を立ゆく
とうゝ芦の者ハ夏まよあり萩の者ハ秋よあり居ハ夏羽切り
をしらく其萩の中にもしそうやせハこゝろまく此哥二首へとそ
読とやはりまてりある説可用否哉
夏衣うつてかりつ
心ハ明しうすき衣を
御室　暑月に独り樹
せまるんしゝ男を嫌（サヘ）
むすめ御室の歩を採
月延長武王水ゝ之
夏の月よいつるやて
涼風にとゝくと

御室へと詠る　源雅実（後入道太政大臣　号久我太政大臣顕房公子）
夏乃月よあかるゝゆくきさしね名お
春河風やよきさくかきさらん
夏乃夜の月といふ心をよみ侍
土御門内大臣通親公
くる

いとよまく吹
よさのしまやとし
稜むミぞの風や
とらんと花のおと
ひとよまそそみの魂
夜のよれ月のかげを
心得し
あふれと六おくる声し
昼のやさしき月を
まハ夜明るとも
とはしとて
夜乃よもすから
童蒙抄云朗詠集ニ
月照平砂ニ夏夜霜
と云詩乃こゝろなり

夜乃更此月行くあく入ぬるよ
やまわるあらり新ハとめさらん
大弐資通（参議／従三位済政子）

あかをりハあくるまてしとおもふつき
ひるよかゝるね夜乃よ此月

宇治前太政大臣家よ卅講のうち
哥合に侍りけるによみ侍りける
民部卿長家（御堂息）

夜乃よもすからしろ月新ハ
庭さしろく乃霜と見えて浦く

とこ夜乃ゆかてつる
かくほよぜれる帰し
ハ蜀乃成都よ錦官
城にて色錦乃家妙
の声
いかなんこよひの象
今朝ハ露をおけ
あり床夜のまでし
ひ尋ぬるまいらんと
さびやこよひの
わすいらんとの声
まく人も嫁
我独ねる床とい
みくしえし嫁
まかわるかとそ

中納言定頼
とこ夜乃ふかてる庭ハわしまけり（ます）
とれるハしきれさりしとそ思ふ

名海の家ゟく寄の秋床夜とし
とふ心を詠る　能因法師
いかなんこよひ乃ねよとく夜乃
けさハ露乃もまけり有かつる

題しらす　曽祢好忠
きく人も嫁の家路に告やん
わらひかわるゝと夜乃なけり

乃おもれ有乃仲之
夏ふかく成ぞしにける
古今歌ハすさめずか
る人もなしとよめる詞
ありさびしく夏深く
この杜乃しげりこそ
の人のかる草をよ
めるなるべし　大荒
木杜ハ山城也
かくもあつく夏の涼しく
いつ乃まにやらん秋の
来るとにやあらんとぞ
せらるに三条右大臣
人にしられでくるよし
もがなの歌をよまれけり

平兼盛

夏ふかく成ぞしにける大あらきの
もり乃下草なべて人かる

夏乃涼しきをよみ侍る

堀河右大臣　頼宗公（御堂殿男）

かくもあつくハ夏乃すゞしくなりぬるハ
人の志てまでぞ秋やきぬらん

（と侍る）

それ乃夏の有明の月をよめる

内大臣　師通公

夏乃よハありあけの月をとる袖よ

此哥て字濁てよむ
へと当流とす
夏のよハ有明の月を
心明と風情も面白しと
なり
夏山乃ならの葉
夏こもり（納涼せし）
来信なきこそ
も秋のとよめる心
て家隆卿の風そよぐ
楢乃小川も此ならを
よめるなりや
みそぎせハおつかん
とゝ山とそきを
まけくやうによめり

秋をもやどす風ぞすゞしき

俊綱朝臣乃もとにて晩涼如秋といふ心
をよみ侍る　源頼綱朝臣

夏山乃ならの葉そよぐ夕ぐれハ
ことしも秋乃こゝちこそすれ

屏風乃絵に夏乃末はらへとする乃
山乃ゐるところをよめる

大中臣能宣朝臣

みそぎせし河のなかりあんとて山
秋よりさきのながれぞあすそれ

夏乃末よ小倉山の
飛去りまし河つ風
すゝしく吹え侍
さよふかき岩井の水の
心おきつかるへし
六月なくしハ六条
耳敏河畔の河合を
少く夏祓せすおた
みなつきも河よよる心
河つる心ハ荒觸（アラフレ）を
人和乃字の心にも上
と祢なうてなりとも
河逢おる心かくは
もとこ山河の稿（つまハゝ）忠見集ニ入ある千の心清くゆるにてなるの
祢なる旬 拾遺ニ（さゝ入）あすまする祢もすきて今ハ心の秡ぬなり

いつみ乃こゑ井に入てすゝしとふ
やとよみ侍る 源師賢朝臣 左中弁 参議資通子
さよふかき岩井乃水のおときけハ
むすはぬ袖もすゝしかりけり
六月祓をよめる 伊勢大輔
みなかみも河うるこゝろおもしろし
波もあそう乃そく（志はし）を